

# 西郷隆盛の漢詩と中国古典

松尾善弘

## 序言

西郷南洲翁の遺作漢詩約二百首のうち、中国古典に由来する故事や成語・歴史上の人物等を詩材に引用した二〇首あまりを、平仄式の検証を中軸にしながら読み解いてみたい。激動する当時の時代背景とも照合しつつ、真情を吐露した漢詩作品に肉迫して「儒学者」西郷隆盛の新生面が探りあてられれば幸いである。

漢詩を読み解く上で最も重要な鍵となるのが、漢語の言語的特質である声調すなわち平仄と平仄式を点検し正解を追究していくことである。

現代漢語の第一声（中古漢語の陰平声）と第二声（同陽平声）を平声という（○印で表示）。第三声（上声）と第四声（去声）および中古漢語で語尾に p・t・k（日本漢字音でフ・ツ・ク・チ・キの語尾となる）音を持っていた入声にっしやうを合せて仄声という（●印で表示）。

作詩上の平仄その他の規則については個々の作品で随時解説する

が、平仄式の四基本型を常に念頭に置いておくこと読解に便である。

近体詩の一詩の平仄式は、五・七言句とも次の四基本型をもとに、①「反法（奇偶句の平仄を反対にする）」②「粘法かんぱう（偶奇句の平仄を同じにする。但し、頭粘尾不粘。頭はくつつくが尻尾はくつつかない。）」③「平声字押韻」の三条件を全うするように組合せて四種の平仄式が出来る。

### 七／五言句四基本平仄型

- 〔平／仄起り平終り型 ○○○／●●●○○○〕
- 〔平／仄起り仄終り型 ○○○／●●●○○●〕
- 〔仄／平起り平終り型 ●●●／○○○●●●◎〕
- 〔仄／平起り仄終り型 ●●●／○○○●●●〕

（◎印は平声押韻）

実作の際、「二四六分明（二四不同二六対）——基本型はそうなっている」に留意し、「一三五不論（一三五字目は基本型に違背してよい——但し同一句又は次偶句の一三五字目を使って相殺し平仄数を元に戻す＝救拯法）」という作詩規則を守らねばならない。



し(書きつけ)たものという。

・韓信韓(？)前一九六、淮陰(江蘇省)の人。張良・蕭何蕭何とともに三傑。高祖の天下平定に数々の功績をあげた。項羽軍滅亡のあと楚王となったが、のち淮陰侯におとされ、さらに呂后の謀略にあつて殺された。

・令終物事の終り方をりつぱにする。

・淪亡ほろびる。落ちぶれる。

・怪底底には(1)疑問の助字(なに、なんぞ)(2)助字的(の、ところの)と同じという辞典解説がある。ここは怪哉、怪来、怪特などと同じ(2)の用語であろう。現代漢語の怪不得、怪道(道理で、するものそのはずだ)の反義語で、到底、徹底の底と同じ助字の用法とも考えられる。

・跨間志韓信の股くぐり 少年の頃、淮陰の無頼の徒に侮辱された韓信は、陰忍自重して命令通りにその股の下をくぐった。

「韓信乞食」(劇曲の名) 放浪中の貧乏少年韓信を哀れんで洗濯女が食を与えた話。

「韓信升壇」(「蒙求」の標題) はじめ漢王に重用せられぬことを察した韓信はその幕下を逃げ出したが蕭何が連れ戻し、漢王に説いて吉日に壇場を設け礼を尽して大将に拜された。

◎西郷の生涯は時と場所こそ違え、そのまま韓信のありように酷似していると言えよう。

## 2 (二六) 冬夜読書

1 風 鋒 推 戸 凍 身 酸 [平—平型]

2 兀 坐 披 書 雪 裡 看 [仄—平型]

3 蘇 武 穿 中 甘 苦 処 [仄—仄型]

4 概 然 読 了 寸 心 寒 [平—平型]

△詩形・押韻・平仄の検証▽

七言絶句

酸(蘇官切)、看(丘寒切)、寒(河干切)が上平—四寒の韻。初句末が平声字だから「平声字押韻」の規則に従う。七言詩は初句が「平—平/仄—平型」が正格作品である。

1句3字目、4句1字目は基本平仄型に反したまま救拯せず。3句1・3字目はそれぞれ逆にして一句内での救拯。2句は基本型通りだから本詩の○対●は元に戻って14対14。

△読み下し・通釈▽

冬夜の読書

1 風鋒 戸を推して凍身酸たり(鋭い矛先のような寒風があら家の板戸を推して吹き込み、凍えた身体を痛めつける)。

2 兀坐して書を披き雪裡に看る（身じろぎもせず正坐して書を開き雪降る中で読み進む）。

3 蘇武奔中に苦を甘しとせし処（蘇武が囚われの穴蔵の中で艱難辛苦に耐えたくだり）、

4 慨然として読み了れば寸心寒し（胸をつまらせつつ読み終えたと心底冷えきってしまうのだ）。

△語釈・補注▽

『西郷隆盛全集』（以下『全』）第五卷では「寒夜讀書」。沖永良部幽

囚中の文久二、三年の冬又は後年の作かとする。

・風鋒ふう鋒の穂先でつき刺すような風の意であろうから「鋒風」の方が語順にかなう。

・酸い酸つつらい、くるしい、いたむ、かなしむ。

・兀坐ご兀坐ざ姿勢を正して坐る。

・蘇武そ蘇武ぶ前漢の武帝、杜陵の人。武帝の命で匈奴に使いたが、大窖あなぐらの中に幽閉され飲食を絶たれた。苦節十九年、昭帝が匈奴と和親するに及んで帰国した。（『前漢書』五十四）

・穿く穿せい、おとし穴。ここは「窖」あなぐらのこと。

・慨然がい慨然ぜん胸がつまってなげくさま。

・寸心すん寸心しん一寸四方の心。

〔蘇武持節〕（『蒙求』標題）

① 蘇武が使者の旗印として持って行った節（割り符）。

② 蘇武の節操。

〔雁書〕ガシヨ 消息を伝える手紙。匈奴に捕らえられていた蘇武が、雁の足に手紙を結んで都へ消息を知らせた故事から。（雁信、雁帛、雁素とも）

◎ 幽囚生活環境に多大の差があるとは言え、両者に共通する艱難辛苦に耐える精神力、君主を奉じてやまない忠誠心を酸鼻の思いで読み取ることができる。我が身の現状に照らし合わせながら蘇武のありように一体感を抱き、心酔して限りなくデス・デザイア（死願望）に傾斜して行く西郷の心境が偲ばれる作品である。

3 (六七) 失題

1 坐● 窺○ 古● 今○ 誦● 陳○ 編○ [平―平型]

2 富● 貴● 如○ 雲○ 日● 幾● 遷○ [仄―平型]

3 人○ 不● 知○ 吾○ 何○ 慍● 有● [仄―仄型]

4 一● 衣○ 一● 鉢● 任● 天○ 然○ [平―平型]

△詩形・押韻・平仄の検証▽

七言絶句

編（卓眠切）、遷（親然切）、然（如延切）が下平一先（蕭前切）の

韻。

初句4字目の「今○」は二四同で拗体となる重大違反。ここは3字目の「古●」と転倒させて「今古」とすれば、1字目「坐●」（基本型は○で作るべきところ）と相殺され（救拯）、意味も同じである。3. 4句の1字目はそれぞれ平仄を逆に作って二句にわたる救拯。

△読み下し・通釈▽

失題（無題に同じ）

1 坐して今古を窺ひ陳編を誦す（机の前に坐って古今の故事来歴を探らうと古書を繕いた）、

2 富貴は雲の如く日に幾たびか遷る（豊かな財産も高貴な身分も浮き雲のように一日のうち何度も移り変わるものである）。

3 人の吾を知らざるも何の慍ることか有らん（他人が自分の真の姿を知らなくてもどうしてむかつくことなどあろうか）、

4 一衣一鉢天然に任せん（一張羅の袈裟一碗の托鉢の禅僧のように自然のまま無欲恬淡の生活に身を任せよう）。

△語釈・補注▽

・ 陳編 古書。ここでは『論語』のこと。

・ 富貴 豊かな財産と高貴な自分。「死生有命、富貴在天／死生命有り、富貴天に在り（死ぬも生きるも天命、富貴貧賤も天命）」『論語』

顔淵第十二

・ 如雲 如浮雲。あてにならないことのとえ。全く関係のないことのとえ。「不義而富且貴、於我如浮雲／不義にして富み且つ貴き

は、我に於いて浮雲の如し（不正な方法で裕福になったり出世したりすることは、私にとっては空に浮かぶ雲のように無縁なことである）」

『論語』述而第七

・ 幾 ①居希切○キ・ケ。（形）ちかい。（副）ほとんど、かすか。（名）きざし。②拳豈切●キ・ケ。（疑問数詞）いく、いくつ、いくばく。③其既切●、こいねがう。ここは「幾十遷（うつる、動詞）」だから①と②を混同し誤用している。

・ 慍 いかる。胸に不平がつかえむかついていかる。「人不知而不慍、不亦君子乎／人知らずして慍らず、亦た君子ならずや（世の人が自分のことを認めてくれなくとも不満に思ったりしない、そういう人間もまた立派な君子と言えないだろうか）」『論語』学而第一

・ 衣鉢 袈裟と托鉢用の鉢。①師から伝えられた仏法の秘伝。②師から伝える学問・技芸の奥義。

・ 天然 人の作為が加わらず、自然のままであること。ここには「あるがままに生きること、日常生活のなかにも真理があること」を説く

禅宗の思想と「無為自然であれ」と説く老荘の「道」の思想が混在しているようだ。西郷という一個人の頭中で、儒仏道の思想が混然一体

となって渦まいていたと見ることができようか。

○富与貴、是人之所欲也。不以其道得之、不处也。／富と貴とは、是

れ人の欲する所なり。其の道を以て之を得ざれば、処らざるなり。『論語』里仁第四

○富貴不能淫／富貴も淫する能はず（富貴を与えることを条件に

誘つても、その人の心を動かすことができない。『孟子』 滕文公下<sup>3</sup>

cf. 本詩も文久二年ごろ沖永良部島幽囚中の作とされる。

#### 4 (六八) 失題

1 禍 ● 福 ● 如 ○ 何 ○ 転 ● 倒 ● 心 ◎ [仄—平型]  
2 平 ○ 生 ○ 把 ● 道 ● 謁 ● 朱 ○ 門 ◎ [平—平型]  
3 幾 ● 回 ○ 抛 ○ 死 ● 臨 ○ 兵 ○ 事 ● [平—仄型]  
4 忠 ○ 怨 ● 金 ○ 言 ○ 不 ● 食 ● 言 ◎ [仄—平型]

△詩形・押韻・平仄の検証▽

七言絶句

心(思林切)、門(謨奔切)、言(魚軒切)が上平十三元(愚袁切)の韻。

1 2 句は基本平仄式通り。3 句は1・3 字目を互いに逆にして救拯。従つて本詩は4 句1 字目のみ●を○に作つた「一瑕疵完整美」作品である。

△読み下し・通釈▽

失題(無題)

1 禍福は如何ぞ心を転倒せしめんや(災禍や幸福がどうして人の信念を簡単にひっくり返せるだろうか)、

2 平生道を把りて朱門に謁す(ふだん私は確固たる正義の道を以て高貴の門に出入りしてきた)。

3 幾回か死を抛ちて兵事に臨み(これまで何度も命を投げ出して戦争に従事してきた)、

4 忠恕の金言 言を食まず(そうしていついかなる時もまごころを尽し思いやりの心を持つという誓言に背くようなことはなかったのだ)。

△語釈・補注▽

・把にぎる、とる(動)。処置する対象をもちあげて示すことば(前置詞)。

・道人のふみ行うべき道。ここは明らかに儒教(孔子)思想の「仁の一貫の道」である。「参乎、吾道一以貫之/参よ、吾が道は一以て之を貫く(曾参よ、私の道は唯一の仁の信念で貫かれているんだよ)」

『論語』里仁第四

・謁まみえる。身分の高い人にあう、申し上げる。拜謁。

・朱門朱ぬりの門。転じて高位高官の邸。公卿や大名やしき。

・抛なげる。なげうつ、なげすてる。

・忠恕偽りのない誠意、まごころと自分を思うのと同じように相手を思いやる心。「曾子曰、夫子之道、忠恕而已矣/曾子曰く、夫子の道は忠恕のみと」。『論語』里仁第四 「為人謀而不忠乎/人の為に謀り

で忠ならざるか」。同学而第一「其恕乎、己所不欲勿施於人／其れ恕か、己の欲せざる所は人に施すこと勿かれ」。同衛靈公第十五<sup>6</sup>

・金言Ⅱ金句。教訓となるりつばなことば。かたく誓ったことば。

・食言Ⅱシヨクゲン・ゲンをはむ。自分の言ったことに背き実行しないこと。うそを言うこと。

○「儒学者」西郷の真骨頂を端的に表明した作品である。仁と忠恕こそ孔子を祖とする儒教思想の核心語であり西郷の金言（一貫道）でもあったわけだ。

## 5 (一六二) 秋暁

1 蟋 ● 蟀 ● 声 ○ 喧 ○ 草 ● 露 ● 繁 ○ (仄―平型)

2 残 ○ 星 ○ 影 ● 淡 ● 照 ● 頽 ○ 門 ○ (平―平型)

3 小 ● 窓 ○ 起 ● 座 ● 呼 ○ 兎 ○ 輩 ● (平―仄型)

4 温 ○ 習 ● 督 ● 来 ○ 翻 ○ 魯 ● 論 ○ (仄―平型)

△詩形・押韻・平仄の検証▽

七言絶句

繁（符袁切）、門（謨奔切）、論（慮昆切）が上平一三元（愚袁切）

で押韻。

1 2句は基本平仄式通り。3 4句は1字目をそれぞれ逆にして二句にわたる救拯。更に4句は3・5字目を逆にした一句内での救拯のあとが見える。従って本詩は○対●が14対14に戻った完璧な作品である。

△読み下し・通釈▽

秋暁（秋の日のあけがた）

1 蟋蟀声喧しくして草露繁く（こおろぎの鳴き声やかましく露のおりた草葉は重い）、

2 残星影淡くして頽門を照らす（明け方まで残った星の光がくずれた門を淡く照らしている）。

3 小窓に起座して兎輩を呼び（小窓近くの文机からゆっくり起ち上って子供らを呼び）、

4 温習を督し来たりて魯論を翻す（おさらいを促して論語を繙いた）。

△語釈・補注▽

・蟋蟀Ⅱ羽をさつさつと摩擦させる音をまねた擬声語からきた虫の名。こおろぎ、又きりぎりす。

・頽門Ⅱくずれかかった門。

・起座Ⅱ席から立ち上がる。「起坐」おきあがって坐る。ゆっくりたちあがる。

・温習Ⅱおさらい。復習。既に学んだことをくり返して熟すること。

・魯論Ⅱ孔子の言行録「論語」。漢代、斉論・古論・魯論の三種があ

り、魯人の伝えた魯論が後世『論語』の異名となった。『論語』は紀元二八五年（応神天皇一六年）日本に伝来、以後わが国の教育の中心となった。

○二千年来、中国の国教と化した儒教の思想の原点が『論語』であり、それは又わが国の思想や社会規範の根幹ともなったと言える。そうして、西郷漢詩を読み解く中で我われは西郷のもの考え方や行動の基底にこの儒教の精神が根深く横たわっているのをはつきり見ることができるのである。

### 6 (六五) 志感寄清生兄

1 去	来	朝	野	似	貪	名	◎	〔平—平型〕
●	○	○	●	●	○	○		
2 竄	謫	余	生	不	欲	榮	◎	〔仄—平型〕
●	●	○	○	●	●	◎		
3 小	量	応	為	荘	子	笑	●	〔仄—仄型〕
●	●	○	○	○	●	●		
4 儀	牛	繫	杙	待	晨	烹	◎	〔平—平型〕
○	○	●	●	●	○	◎		

△詩形・押韻・平仄の検証▽

七言絶句

名（弥并切）、榮（于平切）、烹（披庚切）が下平八庚（居行切）の

韻。

1句1・3字目は平仄を基本型と逆にして一句内での救拯。234句も基本平仄式通りで平仄上完璧な作品である。

△読み下し・通釈▽

感<sup>しる</sup>を志<sup>せ</sup>して清生兄<sup>せいせいけい</sup>に寄<sup>よ</sup>す（感懐を書きとめて清生「木場伝内」兄に届けた）

1 朝野を去来するは名を貪<sup>むす</sup>るに似たり（朝廷に仕えたり野に下つたりするのは一見名譽を求めていると思われれるかも知れない）、

2 竄<sup>さんたく</sup>謫<sup>たく</sup>の余生 榮<sup>えい</sup>を欲<sup>ほ</sup>せず（鳥流しにあつて余生を送っている私は、今更榮譽を欲しがったりするものではない）。

3 少量は応<sup>まさ</sup>に莊子の笑ひとなるべし（だが、このたびはからずも朝廷に再出仕することになった。このようなちっほけな料見では、きつと莊子の笑いものとなるだろう）、

4 儀牛杙<sup>ぎぎうやく</sup>に繫<sup>つな</sup>がれて晨烹<sup>しんぱう</sup>を待<sup>まち</sup>つ（宮仕えは廟堂で杙<sup>くい</sup>に繫<sup>つな</sup>がれた生けにえ用の牛が翌朝早く煮殺されるのを待<sup>まち</sup>つようなものだ）と莊子が言っているではないか）。

△語釈・補注▽

・竄謫⇨竄流、竄逐。罪人を遠い地方に追放する。

・少量⇨度量の小さいこと。小器、度量のせまい人。

・莊子⇨戦国時代、宋の豪（河南省商丘市）の人。莊周。その著書『莊子』は老子の思想を継ぎ、人間は欲望を捨て無為自然を旨とし、自然の変化に応じて生きるべしと主張。人間が自己の知性にふり回され



るむなしさと安心立命の大切さを豊富な寓話を使って説いた。

・犠牛 〓 いけにえに用いる牛。

・晨烹 〓 朝早く煮る。烹刑、かまゆでの刑。

〔莊周畏犧〕（『蒙求』標題）或聘於莊子、莊子心其使曰、子見夫犠牛乎。衣以文繡、食以芻叔、及其牽而入於大廟、雖欲為孤犢、其可得乎／或ひと莊子を聘す。莊子その使に應へて曰く、子は夫の犠牛を見たるか。衣するに文繡（きれいな着物）を以てし、食するに芻菽（まぐさと豆）を以てするも、その牽きて大廟に入るに及びて孤犢（一頭の子牛）たらんと欲すと雖も得可けんや。『莊子』列禦寇篇

〔莊周之夢〕莊子が、夢で蝶になったが、めざめて後、人間である自分が夢で人間となったのか、元來蝶である自分が夢で人間となっているのかの判断に迷ったという寓話。（齊物論篇）結びに「之をこれ物化（世の万物はすべて変化してゆくものだ）と謂ふ」とある。

〔鼓盆而歌〕莊子の妻が死んだ時、どんぶりばちをたたいて歌った故事。生きることは必ずしも喜ぶべきことではない、死ぬことは必ずしも悲しむべきことではないという思想を表わす。（至楽篇）

○『全』は「失題」。本詩は西郷が明治四年、朝命に応じて上京する際、感想を詠い木場伝内（清生）に送ったものとする。

◎波瀾万丈の生涯を送った西郷は、おそらく生前に幾度もの行蔵（出処進退）の関頭に立ったであろう。その一つに本詩のような苦渋の選択を迫られた場面があった。

朝廷に再出仕するか、下野のまま自然児として余生を送るか。二つ

の道ははからずも中国の二大思想そのままに、一つは仁義と忠君愛国の儒教の道であり、一つは自由な精神世界に遊ぶ無為自然の老荘思想の道である。現実生活の上でも両思想を体現していた「儒学者」西郷が前者の道を選んだのはいわば当然の帰結であるが、「両思想のはざまにあつてどれほどの煩悶をくり返し、肯て横死への道を選びつき進んで行つたか、その心底を推し量れば推し量るほど酸鼻の落涙を禁じ得ない。

7 (八二) 賀正

1 彭祖	何希	犬馬	年
○(●)	○	●	◎
2 不牽	塵累	握閑	権
●(○)	●	●	○
3 新正	祝賀	兼人	異
○	●	○	●
4 静誦	南華	第一	篇
●	○	●	◎

△詩形・押韻・平仄の検証▽

七言絶句

年（寧顛切）、権（達員切）、篇（紙延切）が下平一先の韻。

初句（仄―平型）。2句の1・3字目平仄を逆にして一句内での救

拯。34句は基本型通り。従って本詩も1句1字目のみ基本型に違背した「一瑕疵完整美」作品。

△読み下し・通釈▽

賀正

1 彭祖は何ぞ希はん犬馬の年を（何百年も生きたという彭祖だがどうしてむやみに犬馬の齢を重ねることなど願っただろう）。

2 塵累を牽かず閑権を握る（おそらく世俗のわずらわしさに引きずり回されたりせず、悠々自適の日々を過す権利を握っていたのだ）。

3 新正の祝賀を人兼異なり（私も新正月のお祝いを普通の人とは異なっ）。

4 静かに誦す南華の第一篇（一人静かに『南華真経』を読み、物我一如、変化してやまぬ異次元の世界で遊ぶのである）。

△語釈・補注▽

・彭祖 古代、伝説上の仙人。堯帝の臣下で、殷の末年まで七百年余を生きたとされる。長寿の代表者。

・塵累 ①悟りの妨げになる煩惱。②俗世の間の煩わしい人間関係。

・閑権 閑適、ゆつたりと心ゆくままに暮らす権利。「権」は押韻と

「握」字との関連で考案したものでらう。

・兼○と。与●・及●と類語。

・南華第一篇 、『南華真経』（『莊子』の別称）第一卷内篇の逍遙遊

第一。冒頭の文「北冥有魚、其名為鯢、鯢之大、不知其幾千里也。化而為鳥、其名為鵬／北冥に魚有り、その名を鯢と為す。鯢の大きさ、

その幾千里なるかを知らざるなり。化して鳥となる、その名を鵬と為す。」

◎『全』は明治八年正月の作かとする。すると消え失せる寸前の灯明の輝きにも似た、西郷晩年の至福の閑適生活を描出したかけがえのない作品ということになる。

8 (一二三二) 偶成

1 生	○	涯	○	不	●	覓	●	好	●	恩	○	縁	◎
2 遊	○	子	●	傾	○	囊	○	開	○	酒	●	筵	◎
3 洛	●	苑	●	三	○	春	○	香	○	夢	●	裡	●
4 身	○	為	○	胡	○	蝶	●	睡	●	花	○	辺	◎

△詩形・押韻・平仄の検証▽

七言絶句

縁（兪絹切）、筵（夷然切）、辺（卑眠切）が下平一先での押韻。

初句（平―平型） 1・3句は基本平仄型通り。2句の1・5字目、4句3字目ともに●を○に作る。ために全詩の○対●は17対11となった。

△読み下し・通釈▽

偶 成 (たまたま出来あがった詩)

1 生涯せいゐ 覚もとめず好よき恩縁 (自分は生涯縁故の好よしを求めるような人間ではないが)、

2 遊子ゆうし 囊のうを傾けて酒筵を開く (旅客の来訪もあつたこととてなければ、

3 洛苑らくえんの三春香夢かうむの裡 (京の都の春の宵、酔って眠ればかぐわしい花の香りの夢の中)、

4 身は胡蝶こてふとなりて花辺に睡る (いつの間にやら身は胡蝶となって花園の中で眠っていた)。

△語釈・補注▽

・ 覓みベキ、もとめる。さがしもとめる。

・ 恩縁おんゑん 縁故。『全』が一本「因〇」とする方が熟している。

・ 遊子ゆうし 旅人。底本は故郷を離れて京都に仮り住まいの西郷その人とする。1句との関連から「訪問客 (のために)」と解してみた。

・ 囊のう ノウ、ふくろ。ここは「錢袋」財布のこと。

・ 筵いん エン、むしろ。筵席、宴会の座席。

・ 洛苑らくえん 洛はもと洛邑らくい、洛中、洛京などと称した中国の都洛陽のこと。なぞらえて京都のことをいう。

・ 三春さんしゅん 春。孟春、仲春、季春 (陰曆一、二、三月) のこと。

・ 香夢かうむ 香りのよい夢。花の下などで見る夢。

・ 胡蝶こてふ 『莊子』齊物論中の莊子が夢で胡蝶になった話をふまえて

いる。「莊周夢為胡蝶、栩栩然胡蝶也。自喻適志与。不知周也。俄然覺則遽遽然周也。不知周之夢為胡蝶与、胡蝶之夢為周与。周与胡蝶則必有分矣。此之謂物化。／莊周夢に胡蝶と為る。栩栩全 (ヒラヒラと舞ひ)て胡蝶なり。自ら喻たとみて志に適かなへるかな。周たるを知らざるなり。俄然がぜん (にわか)に)として覺さむれば則ち遽遽然きよきよぜん (はつと我にかえる)として周なり。知らず周の夢に胡蝶と為るか、胡蝶の夢に周と為るか。周と胡蝶とは則ち必ず分ぶんあらん。此れを之れ物化と謂ふ。」

◎晩年の一時期、激動の世にありながら心身共に老莊の世界に遊んだ余裕の真人・西郷像を彷彿とさせる詩である。

9 (五八) 送菅先生

1 相	○	逢	○	如	○	夢	●	又	○	如	○	雲	◎
2 飛	○	去	●	飛	○	来	○	悲	○	且	●	欣	◎
3 一	●	諾	●	半	○	錢	○	慚	○	季	●	子	●
4 昼	●	情	○	夜	●	思	●	不	○	忘	○	君	◎

△詩形・押韻・平仄の検証▽

七言絶句

雲（王分切）、欣（許斤切）、君（拘云切）が上平一二文（無分切）の韻。

初句〔平―平型〕 1句3字目、2句1・5字目、3句3字目、4句1字目をそれぞれ逆にして救拯せず。全詩の○対●は15対13。

△読み下し・通釈▽

菅先生を送る

1 相逢こと夢の如く又雲の如し（私達の出会いは夢のようにはななくまた天空を漂う雲のようであてどがない）、

2 飛び去り飛び来って悲しみ且つ欣ぶ（長い道中を飛び来り飛び去って、会えば喜ばしく別れば悲しい）。

3 一諾半銭 季子に慚づ（同道を果せぬ私の約束は半銭の値うちしがなく、一諾黄金百斤の季布に比べて恥かしいかぎりだ）、

4 昼情夜思して君を忘れず（これからは昼も夜も君を懐い片時も忘れることはない）。

△語釈・補注▽

・菅先生 旧庄内藩士菅実秀。明治八年（一八七六）庄内藩士七人で鹿児島西郷を訪ね、西郷の薫陶を受けた。別れに際し西郷が同道の約束を果せぬことのお詫びに贈った詩。

・季子 季布、秦末漢初、楚の人。初め任侠の徒であったが項羽の將となり、のち漢の高祖に仕えた。楚人の諺に「黄金百斤を得るは、季布の一諾を得るに如かず」とある。（『史記』季布伝。）季布は一度引き受けたことは必ずそれを実行したので人々に信用された。

〔季布一諾／季布の一諾〕（『蒙求』標題）又「季布無二諾／季布に二諾なし」。

・昼情夜思 昼となく夜となく気にかけて思う意であろう。「留別政照子」の結句「遠く波浪を凌ぎて瘦せて君を思ふ」と同じく詩語としては熱さないが、西郷の親しい友人を想う温い心根が読む者の胸に響いてくる。

10 (六三) 武村卜居作

1	卜	居	勿	道	傲	三	遷
2	蘇	子	不	希	児	子	賢
3	市	利	朝	名	非	我	志
4	千	金	抛	去	買	林	泉

△詩形・押韻・平仄の検証▽

七言絶句

遷（親然切）、賢（胡千切）、泉（從縁切）が下平一先の韻。

初句〔平―平型〕 12句の1字目を互いに逆にして2句での救拯。2句の3・5字目を逆にして一句内での救拯。3句は基本型通り。従つ



初句〔平—平型〕 1句の1・3字目を逆にして救拯。2句1字目、3句3字目、4句1字目共に逆にしたまま救拯せず。全詩の○対●は13対15。

△読み下し・通釈▽

詠史（史書を読んで詩を作る）

1 世間は多少天真を失ふ（世の中の多くの人々は人間の純粋な本性を失ってしまっている）、

2 貧富廉貪未だ因を了にせず（貧乏と金持ち、無欲とよくばりなど人間の欲望の根源をまだはつきりと解き明かしていない）。

3 請ふ看よ薇を摘みし夷叔の操を（どうかよく見てほしい、伯夷叔斉の兄弟が周に仕えることを恥として薇を摘んで食べ遂に餓死した廉潔の節操を）、

4 十五城に値せし珍よりも貴し（それは十五城に匹敵した和氏の璧よりも値打があるのだ）。

△語釈・補注▽

・多少 ①多寡、多さ。②多い。③どのくらい。④すこし。ここは②。

・天真 天から与えられた純粹の性。生まれつきの本性。

・廉貪 清廉・きよく正しい、つつましい。貪欲、欲が深い。

・了因 原因をはつきりさとする。

・夷叔 伯夷と叔斉。BC 12、殷末周初の人。殷の孤竹君の二子。孤

竹君は次男の叔斉を跡継ぎにせよと遺言したが、叔斉は兄をさしおい

て継げないと拒否した。白夷は父の意向だからと互いに譲り合い、二人とも国を去った。

のち、二人は殷の紂王を討とうとした周の武王の轡を抑えて止めようとしてきかれず、首陽山に隠れ周の国の粟を食べるのを潔しとせず餓死した。

・十五城珍 和氏の璧」「連城の璧」の故事に基く。戦国時代、楚の卞和氏は山中で原石を見つけ厲王に献上した。王が宝石師に鑑定させると「ただの石だ」というので怒って和氏の右足を足切りの刑に処した。和氏は次代の武王に再びその石を献上したが結果は同じで、今度は左足を切られてしまった。次の文王の時、和氏はその石を抱いて三日三晩泣き続けた。王は不思議に思いわけを尋ね、その原石を細工人に磨かせると果してりっぱな宝玉を得た。（『韓非子』）

のち趙の恵文王がこの「和氏の璧」を入手、秦の昭王が十五城（町）と交換したいというので蘭相如を使い立てた。相如はだまし取ろうとする昭王の意図を見抜き、玉を全うして帰った（「完璧」の由来）。

△『史記』蘭相如列伝▽

・於 比較を表わす助字。

◎伯夷叔斉の清廉潔白の節操が何物にも代えがたい貴重なるものであることを二つの故事を結びつけて説得しようとした詩。だが二故事とも中国特有のかなり現実離れした話であるところが難と言えれば難と言えようか。

12 (一一八) 読田単伝

1 連 子 予 知 攻 狄 時  
 2 九 旬 不 下 力 能 支  
 3 由 来 身 貴 素 懷 鏖  
 4 吝 死 長 遭 兇 女 嗤

△詩形・押韻・平仄の検証▽

七言絶句

時(市之切)、支(章移切)、嗤(充之切)が上平四支の韻。

初句(仄―平型) 1 2句各1字目を逆にして二句にわたる救拯。1

句3・5字目互いに逆にして一句内での救拯。

3句3・5字目を互いに逆にして一句内救拯。従って本詩は4句5

字目のみが基本型に違背した「一瑕疵完整美」作品である。

△読み下し・通釈▽

田単伝を読む

1 連子予め知る狄を攻むる時(斉の賢人魯仲連は斉の名將田単が燕の狄城を攻める時、予知していた)、

2 九旬下らず力能く支ふるを(狄城は九十日間よく城を守って降伏などしないことを)。

3 由来 身貴ければ素懷鏖く(昔から言われるように人間は身分が高くなると素志も弛み)、

4 死を吝しみて長に兇女の嗤ひに遭ふ(命を惜しみ死を恐れるようになって後世まで女子供にさえさげすみ笑われることになるのだ)。

△語釈・補注▽

由単 戦国、斉の臨淄の人。燕の昭王が楽毅將軍に斉を找たせた時、斉は莒と田単を將とする即墨のみ下らなかつた。

(田単火牛) (「蒙求」の標題)

「燕の昭王は楽毅將軍に斉を討たせ、斉の諸城は殆ど降参した。その時、田単が即墨を守っていたが、奇計を策した。牛千余頭を集め、朱色の衣を着せ、刀を角にしばりつけ、尾に葦を束ね油を注いで火をつけ、夜陰に乗じて燕軍に向かつて放った。決死の兵士がその後太鼓を打ちながら突撃し、大いに燕軍を敗つて斉の七十余城を取りもどした。」

・連子 魯仲連、戦国、斉の賢人。田単を援け燕との軍事紛争解決に活躍した。又、趙の亡国の危難を救った。高節を持ち任官せず海上に隠れて終った。(『史記』八十三、魯仲連列伝)

・「攻狄」以下の史実未詳。「斉田単攻聊城歳余、士卒多死而聊城不下/斉の田単聊城を攻むること歳余(一年あまり)、士卒多く死するも聊城下らず」(魯仲連列伝)が典拠か。

瑕疵完整美」作品。

△読み下し・通釈▽

村居即目ソシキヨソクモク（村住まいの目にふれるまま）

1 十里ジツリの坡塘 興を引ききて長し（十里は続くであろう長い土手。いろいろな思いを引き起こさせて尽きない）、

2 西郊ソウキョウの帰犢キョトク斜陽セツヤウに對す（村はずれの道を夕陽を浴びながら子牛が

帰って行く）、  
3 邨翁ソシヤウ鼓腹コフツして豊歳ヨウサイを欣よろこび（村の老農夫は腹づつみを打って豊作を喜んでおり）、

4 万頃マンケンの稔花トクワ 笑語セツゴ香かほし（見渡すかぎりの田んぼの稲穂が笑いさざめきながらよい香りを漂わせている）。

△語釈・補注▽

・坡塘ハカタウ＝堤、堤防。土手を築いて水をためた池。

・帰犢キョトク＝家に帰る小牛。

・邨翁ソシヤウ＝村の老人。

・鼓腹コフツ＝腹づつみを打つ。食足って満足するさま。太平を楽しむ喩え。

〔鼓腹擊壤コフツケキヤウ〕帝堯テイギョウの時、老人が腹づつみを打ち地を撃つて堯の徳を歌い、太平を楽しんだ故事。／老人有り、脯ホ（ほし肉）を含み腹を鼓し、壤ツチを撃ちて歌ひて曰く、日出でて作し、日入りて息イヒふ。井キを撃ちて飲み、田を耕して食らふ。帝力何ぞ我に有らんや。（『十八史略』）

・万頃＝原野や水面が非常に広いこと。

・由来ヨライ＝よって来たところ。元来。以来。  
・鏢ヒョウ＝シヤク。とかす、とけてなくなる。  
・吝キン＝リン。おしむ。ものおしみする。  
・嗤シ＝シ。あざわらう、さげすみ笑う。  
・遭兒女嗤ソウニニシ＝典拠未詳。  
○故事の典拠はおそらく稗史ハイスリの書によるものであろう。『史記』田単・魯仲連列伝には見えない。

13 (一六〇) 村居即目

1	十	里	坡	塘	引	興	長
2	西	郊	帰	犢	対	斜	陽
3	邨	翁	鼓	腹	欣	豊	歳
4	万	頃	稔	花	笑	語	香

△詩形・押韻・平仄の検証▽

七言絶句

長（仲良切）、陽（余章切）、香（虚良切）が下平七陽の韻。

初句「仄―平型」 2句3字目のみ基本平仄式に違背した典型的「一



・稔花＝稻の花。花○は穂ヌイ●の代替か。

◎農作物の豊かな実りをもたらす水を引いて、どこまでも延びている堤防。仕事を終え、夕日を背に家路を辿る小牛のシルエット。豊年を喜び畑地を踏みならしつゝ、鼓舞する老農夫。一面に広がる黄金の稲穂の波の上をかぐわしい香りが漂う。―自然界の豊かなめぐみを受けた自由で平和な農村風景の断片を、まるで絵を見るように描き出した詩想には、西郷の政権社会と無縁な老荘的知足安分の桃源郷の世界が踏まえられていると言えるであろう。

14 (一九〇) 遊赤壁

6 雲 ○	5 浪 ●	4 暗 ●	3 早 ● (○)	2 難 ○	1 赤 ●
晴 ○	碎 ●	霧 ●	帆 ○	比 ○	壁 ●
蘇 ●	周 ○	圍 ○	衝 ○ (●)	千 ○ (●)	誰 ○
子 ●	郎 ○	峰 ○	雨 ●	古 ●	争 ○
寄 ●	疑 ○	震 ●	潮 ○	著 ●	山 ○
風 ○	激 ●	霹 ●	声 ○	功 ○	水 ●
情 ◎	戦 ●	轟 ◎	急 ●	名 ◎	清 ◎

7 豈 ●  
(○) ○  
凶 ○  
此 ●  
夕 ●  
逢 ○  
春 ○  
暖 ●

8 直 ●  
棹 ●  
孤 ○  
舟 ○  
乘 ●  
月 ●  
行 ◎

△詩形・押韻・平仄の検証▽

七言律詩

清(親盈切)、名(弥井切)、轟(呼宏切)、情(慈盈切)、行(何庚切)が下平八庚(居行切)の韻。

初句〔仄―平型〕 1句5字目と2句3字目の●を○に作り救拯せず。「比」は通常(補履切)の紙韻●だが、(頻脂切)支韻○もある。

3句目1・3字目を逆にして救拯。6句の「蘇」も通常(孫祖切)虞韻○だが(蘇故切)遇韻●もある。8句5字目「乘」も通常(神陵切)蒸韻○だが、(石證切)徑韻●もある。

本詩は7句1字目も○を●に作り救拯していないが、全詩の○対●は29対27である。

3・4句と5・6句は「反法」に則っている。↓対句となる条件の①語音(平仄)の対を満たしている。

対句となる条件の②語義の対と③語法の対。

△3/4句√早帆/暗霧(二字の名詞)衝/圍(動詞)雨/峰(名詞)主語S・述語動詞V・目的語O構造、潮声/震霹(名詞)急/轟(形or動)「S・V」構造。

△5/6句√浪(名)・碎(動)／雲・晴「S・V」構造。周郎／蘇子(人名)疑／寄(動)激戦／風情(名詞)「S・V・O」構造。

△読み下し・通釈▽

赤壁に遊ぶ(赤壁周辺を舟遊する)

1 赤壁 誰か争はん山水の清きを(赤壁の山のたゞずまいや水の清らかさの景観を誰が競おうとするであろうか)。

2 比し難し 千古功名を著はすに(大昔から功名を著わす地として赤壁に比べられる処はあるまい)。

3 早帆は雨を衝き潮声急に(船足の早い帆掛舟が雨を衝いて出航すると激流も高鳴り)、

4 暗霧峰を圍んで震霹轟く(黒い霧が峰々を取り囲んで雷鳴がとゞろく)。

5 浪碎けては周郎激戦を疑ひ(波浪が碎け散ると周瑜は激戦になることを予想し)、

6 雲晴れては蘇子風情を寄す(雲が晴れた日には蘇軾が風雅の心を寄せるのだ)。

7 豈に囂らんや此の夕春暖に逢ひ(想いもしなかったのだが、今宵暖い春風に吹かれ)、

8 直ちに孤舟に棹さして月に乗じて行かんとは(そのまま小船に棹さして月の出ている間に遊びに出かけられようとは)。

△語釈・補注▽

・赤壁 湖北省嘉魚県の東北、長江の南岸。三国時代、呉の周瑜が

魏の曹操の大軍を撃破した所。「底本」は本詩を錦江湾周辺の景観をベースにした擬詩とする。

・周郎 周瑜、三国(一七五〜二一〇)、呉の舒の人。字は公瑾。呉王孫権に従って二十四才で將軍となり周郎と呼ばれた。音楽にも精通し、演奏中誤りがあればたとえ酔っていても振り向いて演奏者を見たという。「曲有誤、周郎顧／曲に誤りあれば周郎顧みる」(『三国志』周瑜伝)

・蘇子 前出、(六三)詩。蘇軾は前後二回にわたって赤壁(湖北省黄岡県の赤壁)に舟遊して、「前赤壁賦」「後赤壁賦」を作った。(『古文真宝』)

・風情 自然や詩文のおもむき。上記二賦の内容を指す。

◎暖いある春の日の宵、荒々しい岩肌のうち続く赤壁を思わせる景観の海辺に小舟を浮かべて深い感慨を催した。赤壁の戦いや赤壁の賦を織り込み、作詩上の諸制約を見事に克服して創作した詩である。西郷の博識もさることながら、純真無垢な、物事に素直に感動する心をいつまでも持っていたことを偲ばせる作品である。

15 (一四) 偶成

- 1 雨 ● 帯 ○ 斜 ○ 風 ○ 叩 ● 敗 ● 紗 ○
- 2 子 ● 規 ○ 啼 ○ 血 ● 訴 ● 冤 ○ 譚 ○

3 今 ○ 宵 ○ 吟 ○ ● 離 ○ 騷 ○ 賦 ●  
 4 南 ○ ● 竄 ● 愁 ○ 懷 ○ 百 ● 倍 ● 加 ○ ●

△詩形・押韻・平仄の検証▽

七言絶句

紗（師加切）、譁（呼瓜切）、加（居牙切）が下平六麻（謨加切）の韻。

初句〔仄―平型〕 2句1・3字を逆にして救拯。3句3字目、4句1字目●を○に作って救拯せず。全詩の○対●は16対12。

△読み下し・通釈▽

偶成（たまたま出来上った詩）

- 1 雨は斜風を帯びて敗紗を叩き（横風が雨を伴って破れた日よけを叩いている）、
- 2 子規は血に啼き冤を訴へて譁し（ほととぎすが冤罪を訴え血を吐くようにけたたましく啼いている）。
- 3 今宵吟誦す離騷の賦（今夜、屈原の離騷の賦を吟誦していると）、
- 4 南竄の愁懷百倍加はる（南の小島に流刑中の身とて、憂愁の情はいやが上にも増すばかりである）。

△語釈・補注▽

・雨帯斜風⇨斜風帯雨を平仄の関係上ひっくり返したものの。

・敗紗⇨破れた布製の日よけ。「窓紗」はカーテン。  
 ・子規⇨ほととぎす。時鳥、杜鵑、不如帰とも。  
 ・啼血⇨嘴の口腔が赤く、又、その声が血を吐くように聞こえるところから「鳴いて血を吐くほととぎす」の俗言がある。

・冤⇨冤罪、無実の罪。

・譁⇨カ（クワ）、かまびすしい、やかましい。

・吟誦⇨吟唱。詩歌を声を出し節をつけてうたう。

・離騷賦⇨離は罹る、騷は憂、うれいにあうの意。賦は韻文の文体の様式。屈原作。

・南竄⇨罪人として南島に放逐される。

・愁懷⇨憂懷。うれえかなしむ気持。

〔屈原〕戦国（前三四三？―前二七七？）、楚の人。名は平。楚の懷王に忠を尽し智を尽して仕えたが同列の大夫に讒言され疏まれてしまふ。屈原は離騷の賦を作って王に冤罪を訴えた。

次代の襄王も又讒を信じて屈原を長沙に流した。屈原は漁父の辞諸篇を作って忠誠心を表明し、五月五日、石を抱き汨羅に身を投じた。

〔祭屈原／屈原を祭る〕五月五日、入水した屈原を祭る故事。竹筒の中に米を入れ水に投げ入れ祭る。

◎西郷の漢詩にはこのような讒訴冤罪による不遇の世すぎの後に横死した中国の偉人伝をもとに作詩したものが多い。これらはそのまま西郷の生涯を暗示しているわけだが、彼がどれほどの共感、どれほどの心痛を覚えながらかかる漢詩作りにいそしんだか、察するに余りあ

るものがあると言えよう。

16 (一七七) 題残菊

1	老	圃	残	黄	菊
2	風	霜	独	不	禁
3	匹	如	陶	靖	節
4	彭	澤	宦	余	心

△詩形・押韻・平仄の検証▽

五言絶句

禁(居吟切)、心(思林切)が下平一二侵(千尋切)の韻。

初句「仄―仄型」34句各1字目を逆にして救拯。基本平仄式通りの作品。

△読み下し・通釈▽

残菊に題す(残菊の画幅に書きつけた賛詩。明三、四年の作か。

「全」は児玉天雨の詩会の兼題であったのを、西郷は出席できず、欠席通知に菊花数枝を折り、この詩を添えて贈ったもので明七・八年の作とする。)

1 老圃に黄菊残る(古びた畑に黄菊が咲き残っている)、  
 2 風霜も独り禁ぜず(風雨や霜雪もこの花を抑えつけることはできないようだ)。

3 匹如す陶靖節ヒツジョウ タウセイセツの(その高尚な心は菊をこよなく愛した陶淵明が)、  
 4 彭澤宦余ハウタククワンゴの心(彭澤県令をやめたあとの心境にぴったりだ)。

△語釈・補注▽

・老圃||長年耕作されてきた畑。  
 ・禁||おさえる、とめる、忌みさける。

・匹如||匹似、似ること。

・陶靖節||陶潜、字は淵明の尊称。東晋末(三六五?~四二七)の詩人。潯陽(江西省九江市)の人。自称五柳先生。彭沢の県知事となつたが、八〇日で辞職、「帰去来辞」を作つて帰郷した。酒を愛し自然を楽しむ、琴を友として田園生活を賛美する詩を作り、後世の文学に大きな影響を与えた。

・宦余||役人生活をやめたあと。「宦」は(胡慣切●)、意味は同じ「役人」だが「宦」は(古丸切○)。

17 (一七八) 閑居重陽

1	書	窓	蕭	寂	水	雲	間
2	兀	座	秋	光	野	興	閑



七言絶句

暄クハ（許元切）、渾マ（胡昆切）、源ゲン（愚袁切）が上平一三元（愚袁切）の韻。

初句〔平—平型〕 1句1・3字目を逆にして救拯。2句1・5字目

●を○に。3句は基本型通り。4句は1・3字目を逆にして救拯。

△読み下し・通釈▽

1 淡雲タンウン屋ウチを擁ヨウして毎ツネに春暄シュンケン（淡い湯けむりが湯家を包み込んで、いつも春の暖かさ）、

2 天 温泉を沸わかかし清すみて渾まらず（天が温泉を沸かし湯は澄みきつて濁らない）。

3 静裡セイリの幽懷ユウワイ誰たれか識しり得えん（閑静な温泉場の奥深いもの思いを一体誰が知りえよう）。

4 半窓ハンマカの閑夢カンム桃源タウエンに入る（半開きの窓にもたれのんびりまどろむ夢はいつのまにやら桃源郷に入りこんでいた）。

△語釈・補注▽

・淡雲 〓 あわい白色の雲。湯気に例えた。

・春暄 〓 春の暖かさ。

・清不渾 〓 清澄で濁らない。

・幽懷 〓 心の奥深くいだく思い。

・閑夢 〓 心静かにのんびりした中で見る夢。

・桃源 〓 俗世間を離れた別天地。理想郷。

〔桃源郷〕 晋の陶潜の「桃花源記」に描かれた仙境。晋時、武陵の一

漁夫が桃林中の流れをさかのぼって洞穴に入り込み、そこを抜けると秦の遺民の住む別世界が開けていたという。

◎長年の疲労と宿痾を癒しつつ、ひなびた温泉にどっぷり浸かり、心身共に夢心地になって閑適の一時期を過す西郷の姿が、手に取るように身近に感じられる詩である。

19 (一〇七) 田 獵

1 馳○ 兔● 穿○ 林○ 忘● 苦● 辛○

2 平○ 生○ 分○ 食● 犬● 能○ 馴○

3 昔● 時○ 田○ 獵● 有● 三○ 義●

4 勿● 道● 荒○ 耽○ 第● 一● 人○

△詩形・押韻・平仄の検証▽

七言絶句

辛（斯人切）、馴（松倫切）、人（而隣切）が上平一真（之人切）での押韻。

初句〔仄—平型〕 1句1字目、2句3字目●を○に作り救拯せず。3区1・3字目を互いに逆にして救拯するも、5字目は○を●にした

ため「孤平」の禁を犯してしまった。

△読み下し・通釈▽

田 獵(狩り)

1 兎を駆り林を穿ちて苦辛を忘る(兎を追い林をくぐり抜けて動きまわるうち辛さを忘れた)、

2 平生食を分かつては犬能く馴る(いつも食べ物を分け与えているので、犬はよく馴れてききわけもよい)。

3 昔時より田獵に三義あり(昔から狩りには三つの意義があるといわれる)、

4 道ふ勿れ荒耽の第一人と(そんな狩を楽しむ私を狩道楽の第一人者などと言わないでほしい)。

△語釈・補注▽

・田獵 田も獵も狩りのこと。

・穿林 林の中をくぐり抜ける。

・苦辛 苦しくつらいこと。辛苦。

・平生 日だん、日常。

・三義 ①『全』に、狩りは(1)祖先の廟に備えるため、(2)武備を忘れないため、(3)作物を荒らすのを防ぐためとある。(狩者上所以共承宗廟、下所以教習兵行義/狩とは上は宗廟に共承する所以、下は兵行を教習する所以の義なり。『公羊伝』莊公四の文の注。白虎通曰:為田除害也/白虎通に曰ふ:、田を為すは害を除くなり。『広韻』獵の項)

荒耽 酒色にふけりすぎんだ生活すること。ここはマニア。

20 (七二) 示子弟

1 学	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2 認	●	●	○	○	○	○	○	○	○
3 百	●	●	○	○	○	○	○	○	○
4 千	○	○	○	○	○	○	○	○	○

△詩形・押韻・平仄の検証▽

七言絶句

人(而鄰切)、振(之人切)、仁(而隣切)が上平一真(之人切)の韻。

初句[平—平型] 1句1・3字目を逆にして救拯。2句の振は通常(之刃切●)。3句56字は○●を転倒した特殊型。

△書き下し・通釈▽

子弟に示す(若者たちに示す)

1文を学ぶも主無くば痴人に等し(いくら学問に励んでも主体性が欠ければ馬鹿者と同じだ)。





4 胸 ○ 中 ○ 三 ○ ● 省 ● 愧 ● 人 ○ 饒 ◎

△詩形・押韻・平仄の検証▽

七言絶句

宵（思邀切）、挑（他彫切）、饒（如招切）が下平二蕭（先彫切）の韻。

初句〔平—平型〕2句5字目、4句3字目●を○に作り救拯せず。

3句1・3字目は逆にして救拯。全詩の○対●は16対12。

△読み下し・通釈▽

偶成

1 厳寒に勉強して深宵に坐す（厳しい寒さの中勉強して夜おそくまで机の前に坐っている）、

2 冷面飢腸 灯を数挑ぐ（顔は冷え空腹になって、しきりに灯

芯をかき立てた）。

3 私意看来れば炉上の雪（自分の思索のあとを見つめ直してみると恰も炉上の雪の如く一瞬のうちに消え失せてしまう）、

4 胸中に三省して人に愧づること饒し（胸中深く反省すると世に對して慚愧の念に堪えないことが沢山ある）。

△語釈・補注▽

・数〓しばしば、何度も。

・挑〓灯火の芯をひっかけて上に出す。

・炉上雪〓禅語の「紅炉上一点雪（活火の上に一点の雪をおけば忽ち溶ける／道を悟って胸中に滞礙のない喩『大漢和辞典』）からの抄出か。

・三省〓「曾子曰、吾日三省吾身／吾日に三たび吾が身を省る」（『論語』学而篇）①一日に三度わが身を反省する。②たたびたび反省する。

③不忠・不信・不習（忠ならざるか・信ならざるか・習はざるを伝へしか）の三点を反省する。

○3句は、「自分の個人的見などどうやら炉上の雪のようにはかないものだが」とも訳せそうだが、いずれにしてもやや難解である。

## 22 (一九六) 秋夜宿山寺

1 満	●	○	○	衣	風	露	叩	禅	栖
2 一	●	○	○	点	青	灯	影	惨	悽
3 山	○	○	○	鹿	夜	寒	頻	喚	伴
4 声	○	○	○	声	遙	度	数	峰	西

△詩形・押韻・平仄の検証▽

七言絶句

栖（先稽切）、悽（千西切）、西（先齊切）が上平八齊（前西切）の韻。

初句〔平―平型〕 1句と3句は1・3字目を互いに逆にして救拯。2句は基本型通りだから、4句3字目のみが違背した「一瑕疵完整美」作品である。

△読み下し・通釈▽

秋夜山寺に宿す

1 満衣の風露にて禅栖を叩く（風雨にさらされた旅装のまゝとある禅寺の門を叩いた）、

2 一点の青灯 影悽悽（ぼつんと点った青白い灯明の光が身にしみてかなしい）。

3 山鹿夜寒に頻りに伴を喚び（山甲の鹿がこの夜寒にしきりに伴を呼び交し）、

4 声声遙かに渡る数峰の西（鳴き声が遙か西の山々へ響き渡つていくことだ）。

△語釈・補注▽

- ・禅栖 禅僧の栖む山寺。
- ・影 物を照らして明暗をつける光。
- ・悽悽 身にしみてかなしい。
- ・夜寒 晩秋、衣になって感じられる寒さ。
- ・伴 伴侶、連れ合い。
- ・度 渡る。

○「秋河隔在数峰西／秋河（天の川）隔てられて数峰の西に在り」韓翃（唐）「宿石邑山中」詩

「故人遙在数峰西／故人（古なじみ）遙かに数峰の西に在り」呉寛（明）「静夜独眠高樹上」詩

「吟雨隔在数峰西／吟雨（ザアザアとうそぶくが如き雨）隔てられて数峰の西に在り」川口雪篷作「次韻」

結語

例えば西郷漢詩と勝海舟漢詩を読み較べてみると、近体詩の諸法則に則って作られた西郷の正統派漢詩に対し、勝詩は五七言詩の体裁と押韻法を守っただけのいわゆる漢字並べ詩の域を出ないものである。

だが、面白いことに訓読法に馴れ親しんだ日本人の目には両者の区別ができないどころか、むしろ勝詩の方が語呂がよくわかり易いと映る。片や西郷詩はどことなくギクシヤクして訓読しづらく、解釈に難渋する語句が少なくないと感じるのである。

しかし、両者の作品を近体詩作法上の（1）語法（平仄）（2）語義（3）語法および（4）詩の構想（内容）という観点からその出来栄を評価すると、西郷詩には総じて八〇点以上が進呈できるのに対し、勝詩の方は古体詩作品とみなしても、和臭の強いせいせい合格点を差し上げられるレベルの作品といわねばならない。

両者の違いはどこから生ずるのか。理由は簡単である。平安朝以来、日本の漢詩人たちが本家中国の漢詩人たちに伍して立派な漢詩を作ったのは、古漢語に堪能で近体詩の作詩規則に通じ、正攻法で漢詩作りに励んだからである。一方、訓読を経て日本語化された漢字音・字義・返点語法つまり訓読漢文を基にして作られたのが和製漢詩―漢字並べ詩である。両者は基本的使用漢字数や字義をほぼ共通にして同じ漢字で表記するので、一見ただけではその違いがわからない。

しかし、両者を峻別する簡単だが難しい鑑識方法がある。「平仄」とそれを基に作られた諸規則を順守して作詩されているかどうかを検証する方法である。中古漢語では八声調あったという平上去入各陰陽二種の調値を基に、全ての漢字を「平」と「仄」に二分類した。それらを一〇六の韻目に排列した韻目表。近体詩はそのうちの平声字韻目のグループで押韻させる。「平と仄」を組み合わせた五七言句とも四種の基本型。それに「反法」「粘法」の法則を加味して作りあげた四種の平仄式。「二四六分明、一三五不論」とその具体化の規則「二四不同、二六対」と「救拯法」。更に禁忌事項としての「孤平、孤仄、下三平、下三仄を避ける」など、すべてこの「平仄」を出発点として出来ているのである。

ところで、西郷は当代漢語で中国人と会話できる語学力を持っているたであろうか。答えは恐らく「ノー」であろう。しかし、西郷の漢詩を読み解く限り、チャチな会話力などものともしない平仄を核とした豊富な漢字力を駆使し、漢詩作法に通暁して存分に実力を発揮した西

郷像が浮かび上がってくる。

西郷がその青少年時代、郷中教育の中で漢学の素養を培い、二度にわたる遠島生活の中で漢詩の作法を学び実作に精出したことは、多くの著作で述べられている。その時々師が川田雪蓬であり、児玉天雨であった。

明治五・六年ごろ、ドイツ留学していた若き薩摩藩士寺田弘（号、望南）へ、西郷がアメリカ経由で『古詩韻範』『瀛寰志略』を送ったという記述がある（『全』）。恐らく西郷は多くの漢籍以外に、『詩語集成』等の漢詩マニュアル本も見て参考にしていたと考えられるのである。

#### (注)

- 1 勝部真長著『西郷隆盛』PHP文庫96・2・15 勝部氏は西郷の心底には「死への願望」が潜んでいたと指摘する。斉彬公逝去の際の殉死志望、月照との心中未遂、遣韓使節志願など通底しており西南役で終結したと。

中国古代史に書きとめられた多くの忠臣の自己犠牲の精神・横死の結末から取材した漢詩を作りながら無意識のうちに大いに感化されて行く西郷の姿が彷彿としてくる。

- 2 「幾●」は疑問数詞だから「幾回／処」のように「幾+量詞／名詞」の形で使うのが正しい。「幾遷・歴」の「幾+動詞」は厳密には「幾

十次・度+動」の形にすべきところ。

3 『西郷遺訓三〇』に「命もいらす、名もいらす、官位も金もいらぬ人は、仕末に困るもの也。」の補足説明文として『孟子』のこの条以下があげてある。

4 日中を通じて近体詩作品には五七言詩とも基本平仄式通りに作られたものは少ない。一ヶ所のみ故意に外したと思われる作品を筆者は「一瑕疵完整美」作品と呼ぶことにしている。

5 「子曰、朝聞道、夕死可矣／子曰く、朝に道を聞かば夕に死すとも可なり」(里仁第四)この外、『論語』には「道」が三〇ヶ条以上出てくる。

6 『西郷遺訓』二二。「道は天地自然の道なるゆゑ、講学の道は敬天愛人を目的とし、身を修するに克己を以て終始せよ。」同二四「道は天地自然の物にして、人は之を行ふものなれば、天を敬するを目的とす。」「敬天愛人」の出自を解説したこれらの条の「道」宇宙の自然の物」の考え方は、どちらかといえば道家思想の「道」宇宙の原理、万物の根源」といういい方に近い。しかし、下文にいう「克己復礼(＝仁)」「愛人(＝仁)」は先に見た「忠恕(＝仁)」などとともにもまぎれもなく孔子の「道」の具体化された表現とみてよいであろう。

7 「南洲」は南の小島の意。(「洲」には大陸の意味もある。)(「武邨吉」は中国式に「武邨吉」と観念していたのではないだろうか。西郷は中国歴史上「武」姓の多くの英雄豪傑を一種憧憬の念で見

詩材にもしている。

8 西郷と陽明学については『全』六卷西郷論集成(三)井上哲次郎の項に詳論がある。又、勝海舟は西郷における陽明学を端的に次のように論じている。「西郷南洲などもひどくこの人の徳行と学識とに感服して平生大に私淑して居たらしい。全体陽明の学は簡易直截であるから我国民の気風に最もかなふて居るやうに思ふ。」(『勝海舟全集』第十卷「清譚と逸話」)

9 筆者はかつて孔子の思想は哲学として見れば「客観的観念論」、孟子のそれは「主観的観念論」と論断したことがある。(『批孔論の系譜』白帝社'94・2・10)孟子の流れを自認する王陽明の「致良知」「心即理」「知行合一」の哲学は現代中国でも「心学唯心主義の集大成者」と位置づけられている。(『中国大百科全書』哲学Ⅱ)

陽明の哲学は朱子学徒から「陽明学は禅学と同じ」と論難されたことがある。その超観念性の一点において禅と見紛われる側面を持っていた証拠である。もと禅学で用いられた俗語「箇々円成(おのおのがあるがままで円満に成就していること)」などをそのまま用いて行論していることなどその一証左と言えよう。(『伝習録』精金の比較その三)

大久保も故山に帰臥した西郷を評して「傲世と隠逸の禅学の病に陥った」と言う。(『全』第六卷西郷論集成(一五)大久保利通)「彼れ若し隠逸を悦ばず(つまり陽明学変じた禅にかぶれず―筆者)、飽くまで世俗に混じ、俯仰時務を視て専心国事に従は、何ぞ官を去

るを須ひんや。又何ぞ惨劇を演じて奇禍に罹る可けんや」と。「儒学者」西郷の信奉した儒教思想、なかならず江戸時代の中樞思想となつた陽明学変じた大久保の言「禅」。そのように捉えると西郷の日ごろの言動とその最期のありようが限りなく解けてくると思う。

10 『古詩韻範』五卷 武元登登<sup>ア</sup>著 古詩の韻脚法を説明したもの。

『瀛寰志略』十卷 清、徐繼畬<sup>ヨ</sup>撰 五洲各国について述べたもの。

(二〇〇八年 師走晦日擲筆)